様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３６５

研究課題名（和文）十九世紀フランス旅行記における「観光」の概念の導入と変遷

研究課題名（英文）On the introduction and transition of the concept of tourism in French travel writings in the Nineteenth Century

研究代表者
田口　亜紀（Taguchi, Aki）

共立女子大学・文芸学部・准教授

研究者番号：９０６００５０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：十九世紀フランスで刊行された旅行記を研究対象に、楽しみのための旅行がいかに現代の「観光」に発展していったのかを跡づける研究である。旅は観光を包括する営みであるが、観光を成り立たせているものは何か、観光とは何かというそもそもの問いに答えるために、イギリスからフランスに導入された「観光」の概念を十九世紀にさかのぼってたどり、文学テキストにあらわれる言説を分析した。
また、各時代の文学的潮流と分かちがたく結びついている作家の感性が旅行記の分野でどのように表象されたかを、観光を鍵概念として作品の精読を通して跡づけた。

研究成果の概要（英文）：This study concerns nineteenth century French travel writings. The purpose of this study is to examine the transition from pleasure trip to modern “tourism”, and the relationship between the two. I am also concerned with travel writings and sightseeing. As the journey itself contains some notion of tourism, I have tried to extract from travel writings a definition of tourism and to define the tourism in a historical context, especially during the period during early nineteenth century when the word of “tourism” entered the French language from English.
The study focuses on travel writers in different periods who innovated travel writings by describing several pertinent aspects of their journeys. I also consider these writings from a touristic perspective.

研究分野：人文学

キーワード：フランス文学　旅行記　観光

１．研究開始当初の背景

（１）19 世紀は「旅の時代」と言われる。交通手段や宿泊施設の整備などにともない、かつてない規模でフランス人は国外へと足を伸ばすようになる。万人向けの旅行ガイドブックが登場して旅が一般化する。また刊行される旅行記の数も増大する。旅行記はまず雑誌の記事として掲載され、最新情報を提供する情報媒体的役割を担いつつ、風俗の情景描写と同時に取り扱い、読者の期待に応えるという要請に従って、一般読者に彼方を夢見させた。

（２）旅行記は文学とルポルタージュの境界に位置し、規範を持たないために低級なジャンルとされてきた。しかしながら近年、旅行記の文学的主題に含まれる自己探求の可能性に着目する研究が成果を収め、旅行記研究の可能性が広がってきた。本研究は、その視野の中で、観光との関連に着目した。

（３）旅行記にも関わりのあるガイドブックについて述べると、19 世紀以前、ガイドブックは商人、巡礼者、職人用に特化されていたが、19 世紀前葉に相次いで万人向けのガイドブックが刊行されていた。これによって、無目的の旅、楽しみのための旅、つまり「観光」という考え方が生まれた。すると職業作家による旅行記の立ち位置が問題になる。旅行記作家は読者の獲得する目的から、ガイドブックの内容を踏まえて、旅行記を執筆しているが、本研究課題では、両者の関係を明らかにする必要があると考えた。

研究代表者は、以前の研究課題で、植民地主義的な言説が混じる点に着目し、エキゾチシズムとオリエンタリズムの関係を解明した。他方『フランス文化事典』（丸善出版）でガイドブックと観光に関連する項目を執筆し、いまだ十分に検討されていない問題点を喚起した。

研究代表者の研究では、主に 19 世紀後半の植民地主義時代の文学に限定し、エキゾチシズムの因果関係を検討したが、研究課題からはずれる、次の二点について疑問を残すことになった。一点目はガイドブックの役割、二点目は「観光」と「観光客」の語の定義である。旅と文学を考察する場合に、これまで十分に光が当てられてこなかった観光と文学の影響関係に、研究代表者は新しい研究の意義を見いだした。エキゾチシズムにとらわれるのは「ツーリスト」の特徴であることを論考していたが、新たに研究課題を立てて検討すべき問題であるとの考えが、本研究の出発点になった。

（４）「観光客」（touriste）の語は英語（tourist）から導入されたが、1816 年におけるフランス語文献での初出では「イギリス人旅行者」を指していた。19 世紀を通して旅の文脈の変化、ひいては旅行者の行動様式の変化にあわせて語のコノテーションが変化し、現在では一般的に「旅行者」の意味で使用されている。本研究課題で、フランス 19 世紀中葉までの文献、特に旅行記に現れる〈touriste〉の語を拾い上げ、この語の指示対象を丹念に追い、付与された意味を検討することで、ヨーロッパにおける近代ツーリズムの勃興期の特質を抽出することが課題だと思われた。

２．研究の目的

本研究は、観光黎明期の歴史的かつ文化的状況を念頭に置き、1811～71 年にフランス語で書かれた旅行記において、「観光」の概念の表出を跡づけ、この概念の変遷を明らかにし、現代観光文化の諸問題の根源を探ることを目的とした。この研究を、

（１）　近代的ガイドブックの出版背景と内容
（２）　旅行記書誌の完成
（３）　観光客（ツーリスト）の表象
（４）　現代観光文化への示唆

に分けて考察し、有機的に結びつけて、それらを総括することで、最終的に研究課題の成果が呈示することを本計画の目的とした。

３．研究の方法

本研究課題では、1811 年（作家による旅行記の嚆矢となったシャトーブリアン著『パリからエルサレムまでの旅程』刊行年）から 1871 年（普仏戦争敗北年）までの期間に研究対象を絞り、以下の項目を論考することから着手した。その後、時代をさかのぼり、作家が記述した観光的要素を考察した。その後、２０世紀の作家にもコーパスを広げた。

（１）　近代的ガイドブックの出版背景と内容

ガイドブック（旅行案内書）は具体的かつ実用的な情報を伝達することで、旅を指南し、旅行者を増やしたともいえるだろう。ドイツの『ベデカー』に続いて、1830 年代、フランスではジョアンヌのガイドブックが刊行され、アルプスやイタリアの都市がその記述対象になる。だがガイドブックを偏重する旅行者は旅先で何も見ないと揶揄され、発売早々ガイドブックの弊害が指摘される。

本研究では、19 世紀にフランスで刊行されたガイドブックを精査した上で、ガイドブックが提案する「見るべきもの」が、旅行記作家が描写するものの選定を左右するのか否か、その場合どのように作家に影響を与えるのかを考察し、作家がそれをどのように作品に取り入れたかを考察した。

（２）　旅行記書誌
19 世紀で旅の目的地になるのは、①フランス、②フランス周辺地域（イタリア、スイス、ベルギー、ドイツ）、③オリエントである。

①について、革命時に破壊された歴史的建造物の修復をめざし、考古学的研究が行われた。文学では『ピトレスクな旅行記』というジャンルが確立した。風景、絵、版画入りの旅の記録であり、地方ごとの風光明媚な景色が称えられる。厳しい自然の光景、廃墟となった城や教会が好まれ、ロマン派的な審美眼による美的価値が観光と結びつけられた。

②では、人が多く訪れる場所が観光地となり、ヨーロッパには観光地が生まれたが、旅行記では、人に知られていない場所を伝えることにも意義があるとされる。ただし人が訪れていないということは、その価値がないとも考えうる。

③について、19 世紀には文学者がオリエント旅行を行い、旅行記を流行させた。

（３）観光客（ツーリスト）の表象
1838 年から 40 年代にかけての〈touriste〉の語の使用は、フランス人旅行者の数に比例して、増えていく。この新しい社会現象を戯画で皮肉った『旅行者の生理学』では、「旅行者（touriste）」と題された章には、旅行者の戯画とともに類型に注釈が加えられており、早くも観光客が侮蔑的に捉えられている。さらに、旅行記においても高尚な旅行者と低俗なツーリストという二分法が生まれてくる。旅行記作家がツーリストをもって任じることはないが、他人にはツーリストの判決を下すのである。それでは旅行者とツーリストを分け隔てるものは何であるのか、旅行記の文脈から読み解くことが必須であった。

（４）現代観光文化への示唆
観光文化学ではツーリストの定義が様々に試みられている。観光旅行が人びとの余暇となった現代社会では、誰でも「ツーリスト」になりうる。だが、飛行機や鉄道を利用して気軽に旅が楽しめる現代とは旅のしかたが著しく異なった 19 世紀前半、現代フランス語のコノテーションが、当時受容されていた属性や性質に一致するわけではない。ツーリストの語が辞書で定義され始めるのは 19 世紀後半であるが、その定義を 19 世紀前半の状況にそのまま当てはめるわけにもいかない。本研究では、ツーリストが生まれた状況でそう呼ばれたのはどのような人だったのかを、テキストから読み解くことを目指した。ツーリストのコノテーションの変遷をたどることで、現代観光の諸問題の根源を明らかにし、観光文化に示唆を与えることができると考えた。

４．研究成果

（１）ガイドブックが旅先での行動を指南するものであったとしても、作家の旅行記や旅日記で描かれた内容も、行動の規範となりうる。旅行記も一種のガイドブックとして受容されていることが、十八世紀のジャン＝ジャック・ルソーの例で例証できる。

(2)観光の定義は時代によって異なるが、「観光」という用語が導入、定着する以前にも、観光の要素は存在していたのであり、観光的要素はその後の観光を生み出す先駆的役割を果たしていたことを、十六世紀から十七世紀、十八世紀、十九世紀、二十世紀にフランス、およびフランス語表現の作家の旅に関する記述を分析することで、明らかにした。それぞれモンテーニュ、ルソー、ネルヴァル、セガレン、アレクサンドラ・ダヴィッド・ネール、ブーヴィエの旅に特徴的な性質を明らかにした。

(3)旅行記作家は訪れる土地で異文化理解を試み、他者を問題にすると同時に他者との接触によって余儀なくされる自己の変容を描くことになるのだから、極めて文学的主題を呈示することになる。各世紀フランスの旅行記を対象に、旅による価値観の転換、自己探求と他者理解というテーマに焦点を当てることは、現代における多文化主義の諸要因を考察することにも繋がった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　６件）

（１）<u>田口亜紀</u>、「モンテーニュと温泉」、『旅するフランス語』2016 年 10 月号、日本放送協会・NHK 出版、2016 年 9 月、78-79 頁。査読なし。

（２）<u>田口亜紀</u>、「ルソーとアルプスの山」、『旅するフランス語』2016 年 11 月号、日本放送協会・NHK 出版、2016 年 10 月、82-83 頁。査読なし。

（３）<u>田口亜紀</u>、「ネルヴァルと魔術的地理」、『旅するフランス語』2016 年 12 月号、日本放送協会・NHK 出版、2016 年 11 月、78-79 頁。査読なし。

（４）<u>田口亜紀</u>、「セガレンと『エグゾティスム』」、『旅するフランス語』2017 年 1 月号、日本放送協会・NHK 出版、2016 年 12 月、78-79 頁。査読なし。

（５）<u>田口亜紀</u>、「アレクサンドラ・ダヴィッド・ネールとチベット」、『旅するフランス

語』2017 年 2 月号、日本放送協会・NHK 出版、2017 年 1 月、80-81 頁。査読なし。

（６）田口亜紀、「ブーヴィエと『世界の使い方』」、『旅するフランス語』、日本放送協会・NHK 出版、2017 年 3 月号、2017 年 2 月、84-85 頁。査読なし。

〔学会発表〕（計　　０件）

〔図書〕（計　　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者

田口　亜紀（Taguchi　Aki）
共立女子大学・文芸学部・准教授
研究者番号：９０６００５０２

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし

(4)研究協力者

該当なし